令和2･3年度 神奈川県立学校　第三者評価実施報告書

評価実施校	鎌倉養護学校	課題解決に向けた取組状況への評価･助言 ＜評価委員＞	課題解決に向けた取組の成果と課題 ＜実施校＞
カテゴリー名	特別支援学校		
課題1	医療的ケア児童・生徒への対応における地域も含めた連携・協働体制の整備・充実 ・校内の連携・協働体制の更なる整備・充実化が課題 ・コロナ禍の現状や、今後の自然災害等の発生を鑑み、全学で防災に関する対応する体制づくりがなお一層求められる。 ・教員と専門職との連携の在り方について、支援体制の明確化を含めた検討を行い、相互理解のもとでの連携・協働の強化が求められる。	・毎月の職員会議でのヒヤリハット・アクシデント報告では、具体的な内容を報告し各教職員が自分事としてイメージ化するよう工夫している。こうした報告は、長く続けることでどうしても「形骸化」してくる。今後も取組継続する中で、新たな視点や報告事項の活用などを検討することが重要と言えよう。例えば、「医療的ケア研修」の中で、ヒヤリハット事例を取り上げて、具体的な対応（どうすれば、同様の事態が起こらないか、そうした事態が生じたらどのように対応するかなど）を演習するなどが考えられるのではないか（既に取り組まれているかもしれないが）。 ・福祉避難所運営部会では、医療的ケア児への対応が協議され、実際に地域の方々に医療的ケア児の実態を見てもらい、理解を深めている。とても重要な取組である。地域の中で支援を必要とする弱い立場にある人を理解し、具体的な支援体制を整備する取組は、特別支援学校ならではできる発信と言えよう。今後もこの取組を続けてほしい。 ・教員と専門職（看護師）との連携・協働においては、「むずかしいと感じている」教職員もいる。立場（専門性）が異なる教員と専門職との意見の相違が生じることは、悪いことではない。児童・生徒を中心に意見を交換し、より最適な状況を検討することこそが、連携・協働であるという考え方に立ち返って、連携・協働を見直すことも有効ではないだろうか。	＜成果＞ ・毎月の職員会議でのヒヤリハット・アクシデント報告では、具体的な内容を報告することで共有し、自分事として受け止めることができた。 ・学校の地域の防災関係者を集めた会議を学校で開催した折に、児童・生徒の様子を伝えるとともに施設・設備を見学していただき、学校の理解を深めることができた。 ・教員と専門職との連携・協働においては、立場の違いはあるが、児童・生徒を中心に考えており、より良い方向に向かうよう意見交換ができている。 ＜課題＞ ・ヒヤリハット・アクシデント報告は、現場サイドの質を上げるためのものであることから、活用方法(研修会の実施など）について検討する必要がある。 ・学校の様子を知っていただく機会を、今後も継続して行っていく。 ・連携・協働をより深めていくためには、互いの立場を理解するとともに、連携・協働の意味を職員で共有する必要がある。
R3指標	ヒヤリハット・アクシデント報告を毎月の職員会議で報告する。		
課題2	コミュニティ・スクールの運営体制の整備・充実による、地域交流の促進 ・地域に向けた発信の仕方や、取組みの精査について学校運営協議会を含めて検討し、学校全体及び障がいのある子どもの理解の促進及び地域交流につなげることが課題と考える。 ・近隣の学校との交流及び共同学習の取組みを軸として、障害のある子ども、障害のない子ども双方の学びの成果を明らかにしていけることを期待。	・切れ目ない支援部会の構成員を追加するなどの工夫により、学校の運営体制について、とても具体的で建設的な学校運営協議会が行われている。学校運営協議会での話し合いの内容を的確にまとめて報告されることで、広く学校運営の現状や課題を学校内外の人が共通理解することにつながっていると思う。 ・福祉避難所運営についても、より具体的内容に関する話し合いがなされている。避難訓練を地域の方と共に当校で実施し、地域の方に学校を知ってもらう機会にもなっている。 ・地域に向けた発信の仕方について、地域のニーズの把握に努めながら検討を重ねながら取り組んでいる。訪問調査当初はコロナ禍により、不特定多数の方々への情報発信として、学校ホームページなどの活用が有効と考え、その内容の充実を課題としていた。取組を重ねる中で、地域性（高齢者なども多い）に合わせた紙媒体による「学校だより」の有効性が明らかとなり、本校への興味・関心、児童・生徒や教育活動への理解が深まってきた。現在、学校だよりは、地域の回覧版により2,700世帯の方に読まれ、保護者のみならず多くの地域の方々に好評を博している。紙面上で地域の方との交流の様子も紹介されるなど、地域とつながるツールとなり、さらに地域と「顔が見えるつながり」へと発展してきている。今後も無理なく取組を継続し、地域の方や近隣の学校とのさらなる関係性の発展・強化や、本校や障がいの理解者の増加を大いに期待したい。	＜成果＞ ・切れ目ない支援部会の構成員を追加したことで、活発に意見交換が行われるようになり、学校が行わなければならないことが、あきらかになった。 ・福祉避難所部会で取り上げた計画について、全て実施することができた。それとともに、地域とのつながりができたとともに、学校を知ってもらうこともできた。 ・昨年度から始めた「学校だより」により、今まで以上に地域の方に学校のことを知ってもらうことができた。また、これをきっかけに地域の方から手紙にメールをいただくなど、新たなつながりもできてきた。 ＜課題＞ ・各部会とも、地域の方や関係機関との「顔の見える関係づくり」が大切であると結論づけられているが、これまでつながりができているものを継続していける組織作りが必要である。
R3指標	切れ目ない支援部会の構成員を２名追加し、開催する。		
課題3	ＩＣＴを活用した学びの拡充の推進による、校内・居住地・学校間交流の充実 ・インクルーシブ教育推進の観点から、子ども同士の相互理解の促進が課題と考えられ、校内の学年・学部での交流・連携の充実をはかる。 ・校内間交流は、保護者への安心感・学校への信頼感・理解度のアップにもつながるとも思われ、保護者との関係性の深化により、居住地交流に向けた保護者との話合いの強化につなげることも想定される。 ・ICT を活用し、現在なされている小学校との交流をさらに他校種にも広げることや子ども主体による交流等の実践に活かす活動も検討できよう。	・コロナ禍で児童・生徒の直接的な交流及び共同学習が実施できない中、ＩＣＴ「OriHime」）を活用した小学校との授業交流を行った。この取組で、小学校の児童にとって本学の児童への興味・関心や理解が促進されたと思われる。また、「OriHime」の実体験から、「OriHimeカフェ」などを学習し病気や障がいのある人の理解へとつながるのでは、と期待できる。交流及び共同学習では、こうした双方の学校の児童・生徒にとって「win-win」となる学習活動は、大変有意義である。先生方の準備は大変だと思うが、双方の学校の先生方の連携・協働がさらに積み重なることを期待したい。 ・国立特別支援教育総合研究所との連携・協力により、ＩＣＴ活用の研修、実践研究がこれから実働する。今年度実施した校内研修について、企画・立案及び事後の評価を教職員の意向や実情を丁寧に踏まえて実施した。研修会後のアンケート結果では、「研修会参加」について95%、「研修会での学びが自分の仕事に役立つか」について95%と93%という高い肯定的評価を得ていることに反映されていると言えよう。こうした今年度の取組の成果を生かし、ＩＣＴ活用の充実に向けた研修や実践研究に取り組むことに期待する。 ・その際には、ＩＣＴ活用は、(1)教員にとっての教材・教具、(2)児童・生徒にとっては支援機器、文具、であるという、２つの視点を教職員のみなさんが共通理解して進めることが重要だと思われる。	＜成果＞ ・コロナ禍で児童・生徒の直接的な交流及び共同学習が実施できない中、ICT「OriHime」を活用した小学校との授業交流を行うことができた。 ・訪問あるいは来校（登校）が難しい場合の手段として、オンラインの活用が定着してきた。ＩＣＴ活用研修の成果とも言える。 ・国立特別支援教育総合研究所との連携・協力により、ＩＣＴ活用の研修を、令和４年３月に行うことになった。 ＜課題＞ ・交流及び共同学習を進めるにあたり、それぞれに目標・目的がある。達成状況の評価表を作るなどステップアップしていく必要がある。 ・ＩＣＴの活用事例を教職員に知ってもらい、より積極的に活用できるようになる。
R3指標	校内外の講師を活用し、ＩＣＴ機器を活用した授業実践の研修会を行う。		
		総括評価（これまでの訪問①～④を踏まえた課題解決の取組状況に係る評価） ＜評価委員＞	総括評価を踏まえた次年度の学校運営に係る改善点および改善方法 ＜実施校＞
		各訪問回に校内参観をさせていただき、日常の学校の様子を拝見することができた。そして、児童・生徒との直接話をさせていただく機会を設定していただいた。その中で、以下の点が大変印象的であった。 ・「児童・生徒ファースト」で先生方が取組まれている。 ・児童・生徒がのびのびと学校生活を送っている。先生の大きな声やざわざわした雰囲気はなく、児童・生徒のペースを第一に先生方が児童・生徒からの発信を促しながら見守っている様子がうかがえた。 ・生徒へのヒアリングの際には、自分のことを素直に話してくれた。「友だちや仲間がいて、楽しい。」と話してくれたことが印象的だった。学校が自分の居場所として居心地の良い、安心できる場所であるからこそだと思う。 ・授業づくりにおいて、地域の方々との交流を取り入れその活動を具体的に推進している。「地域の中で育つ子ども」という視点を先生方が大切にしているのだと思った。	【改善点】 ①顔の見える関係づくりの継続及び組織的な取組みへシフトする。 ②ＩＣＴをより積極的に活用する。 ③教職員と看護師の連携・協働をより深め、共通理解を図る。 【改善方法】 ①学部ごとに行われている地域とのつながりをグループ組織の中に組込む。 ②国立特別支援教育総合研究所との連携・協力により、ＩＣＴ活用の研修会を実施する。 ③医療的ケアの連携・協働の在り方について研修会を実施する。